

籠の材料にはカエデ類なども利用されています。

竹細工 山形県は雪国のためか竹林など比較的少ないと考えられます。竹は東南アジアからモンスーン気候の影響する地域の特産物といわれています。孟宗竹・真竹・箭竹・女竹・チンマザサ(根曲竹)などが多く利用されます。竹の性質として柔軟性・強靱な点を生かし、色々な生活用具が生れて来ました。養蚕用の桑かごは竹の裏・表を使って美しい文様を生んでいます。浜辺で漁網を修理する綱受は、真竹と庄内特産のヤダケなどを組み合わせて作り、塩水に耐えられる丈夫な道具になります。

庄内地方は竹細工に利用される真竹が多いので、鶴岡や遊佐町に竹細工の職人や作家が生まれました。遊佐町の吹浦では、真竹の一部をけずりとして緻密で美しい竹細工を作っています。

金工・鋳物 食糧基地としての山形県には小さな町や村にいたるまで野鍛冶職人がおり、農具や打刃物を作っていました。山形の各城下町には鍛冶町があり、職人町として諸役免許の待遇を受けていました。山形の場合は、農具の他に自在鉤・包丁・鋏・鋸などが生産され、「中屋」の屋号の入った鋸は切れ味が良いので全国でも高い評価を受けました。

彫金細工は、木工品との関連で発達し、板金の技術も盛でした。山形の黒柿箆筒・酒田の船箆筒・鶴岡の庄内箆筒などの装飾は美しく箆筒の形に適合したものと考えられます。

山形の鋳物の歴史は古く、一説によれば、前九年の役(11C初)頃に、馬見が崎川の砂を用いてつくったといわれています。また、延文2年(1357)山形築城の際、9人の鋳物師が協力している記録などもあります。このような長い歴史と伝統のもとに、現在でも盛に製作されています。梵鐘づくりの歴史も古いですが、巾広鉄びんなど、柳宗悦氏から激賞されました。鋳物として花器だけでなく、スキヤキ鍋、鍋、鉄びん、灰ならし、五徳など日用品も多く生産されています。

郷土玩具 みちのく山形県の子どものための遊び具

は自然の草木でありました。そこで親たちが子どものために、良い子に生長して欲しいという願いをこめて、玩具をつくるようになりました。山にでかけて木をけずり、人形や木の馬を作ったり、わらや草木で人形をつくりました。これらが発展してこけしなどの木地玩具になりました。県内のこけし職人は山形・蔵王・米沢・白布高湯・天童・銀山・河北町・肘折・鶴岡・温海などに広がっていますが、大別すると弥次郎系・遠刈田系・山形作並系・肘折系・鳴子系などに分けられます。

初春に舞い上がる凧は県内各地で見られますが、特に新庄の隠明寺凧は県の民俗資料として指定されています。幕末に新庄の藩士が、生活のために作ったことが始まりで、現在でも版木があり、市民の手で守られています。

土人形のなかで米沢の相良人形は全国でも有名で、安永年(1770)に製作され、現在は七代目となっています。素朴のなかに気品があり、東北の伏見人形と評価する場合があります。他に、酒田の互人形は素朴で、純朴な感じがします。

山形には、現在一人しか残っていませんが張子人形師がいました。山形は仏壇づくりが盛んで、仏師がおり、仏師が桐の残りを利用して張子人形の型をつくりました。張子人形をつくるために、松やにや蠟を溶かして塗るので黒く光っています。

絵蠟燭は主に庄内の鶴岡市でつくりました。山形にもアカン町がありましたが、電気に押されて廃絶しました。鶴岡の場合は現在でも二軒があり手作りの絵蠟燭として親しまれています。

✂ 主な展示資料 ✂

- ◆ 県内のやきもの・すず徳利・切立・かめ・鉢 50点
- ◆ 漆器 飯椀・椀・盆・酒器・重箱 15点
- ◆ 木工 粉鉢・曲もの・浜弁当・箆筒 20点
- ◆ 織物と染 あいぞめ・布団皮・サンコ着 50点
- ◆ 草工品 靴類・手籠・草履・飯詰・みの・籠・箕 40点
- ◆ 竹細工 手籠・かご・花生・箆 10点
- ◆ 金工・鋳物 自在鉤・灰ならし・鉄びん 15点
- ◆ 郷土玩具 土人形・凧・張子人形 50点
- ◆ 特別出品(雪国調査所収集品より)
 - ブルノータウト作品 果物皿
 - ペリアン女史指導 わら製マット他
 - 朝鮮・東北中国庶民生活資料 計20点

山形の民芸展

— 解説・資料目録 —

1979・9・18(火)~11・4(日)

山形県立博物館

開催にあたって

最近、みちのく山形にも、生活の中に民芸品がすっかりとけこみ、静かなブームを呼んでいます。

この民芸展は、本館が収蔵している民俗資料のなかから、特に民芸的要素をもつ資料を選んで開催いたします。

最近まで、県民が製作し、愛用してきた「もの」のなかに、どのような用と美があるか、展示された資料をとおして民芸の意味を理解していただければ幸いです。

昭和54年9月

山形県立博物館長

解説 山形の民芸展

やきもの 現在のくらしとかかわりのあるような陶磁器の生産は、山形県では江戸末期から始まり、県内各地区に窯場がつくられました。その歴史は、安永元年（1772）の記録が刻印されている大宝寺焼があり、このころより窯場が発達するようになったと考えられます。

県内には、幕末から現代にかけて作られた窯場は23カ所ありますが、大別すると、米沢市周辺の成島焼系、山形市周辺の平清水焼系、新庄や鶴岡を中心とした新庄東山焼、大宝寺焼系と三つに分けることができます。

成島焼系は、上杉藩の殖産政策によって開窯されました。絵付などは禁じられたので、陶工は「うわ薬」を用いて、美しさを表現しました。

平清水焼系は、相馬あたりで修業した小野藤治平・阿部覚右エ門らによって開窯し、資本は大地主・町人が投資しました。白釉に素朴な花鳥山水文様が描かれたものが多いです。弘化年間には磁器の生産も行なわれるようになりました。

新庄・大宝寺焼系は安永から天保にかけて藩政の保護の下で開窯しました。ナマコ釉の陶器が多く、素朴な感じがします。

以上の窯場は、交通の発達により「下りもの」におされて殆んど廃窯になりました。現在では、山形市平清水や新庄市東山に伝統をふまえながら生産されています。その他に、米沢市成島や庄内の大宝寺焼も復興されつつあります。

漆器 東北地方には、会津・津軽塗など代表的な漆器があります。しかし、漆器の原料は山野いたる所で採集され、特に山形県は漆の原料産地として評価されていました。このような原料産地に規模的には小さいが、漆器の生産が行なわれるようになり、各城下町には塗師町とか鞆町などの職人町も見られるようになりました。

山形市の塗師町では株仲間が組織され、会津などの技を修得して発達し、伝統工芸として有名な山形仏壇の装飾に貢献しました。また、三山信仰の行者たちの土産品として販売され、未塗の椀・膳・盆などや紫壇塗が有名でした。

酒田・鶴岡地区には新潟県弥彦の技法を取り入れた磯草塗があり、若干渋い漆器です。鶴岡の竹塗は江戸の鞆師が技法を伝え、現在に至ったものですが、これは竹で作ったように塗り上げるの

が特徴といえるでしょう。

漆器の中で、酒器は興味ある形をしております。角樽は、結納を交わす時とか結婚、新築などの祝樽として愛用されました。袖樽も祝樽の一つですが、上層の人々に愛用されていたようです。

木 工 品 食器の中に「くりもの」があります。朴の木、栃などの大木を利用して、大きな鉢をつくります。庶民のくらしの中には、漆を塗ったようなものはありませんが、大家族の食物を調理するためには必要な粉鉢でありました。また、「ハンゾウ」とも呼ぶ所もあり、鉢の中に石ウスを入れて、ソバ粉などこぼれないようにしました。

木工品の中で、庶民が最も愛用したものに「曲げもの」があります。庄内のワッパ事件の「ワッパ」とか、置賜地方では「ゴロビツ」などと言いますが、杉の柁の部分を暖めながら曲げ、桜皮を用いて止めて作ります。職人たちは、木の性質をうまく利用しています。「まげもの」の中には、織物の糸を績む時に貯えておく「オボケ」などがあり、黒くなるまで利用されたもの程庶民のくらしが感じられます。庄内地方の漁民たちが使う浜弁当は酒田の特産で、三食入ようになっており、海や汐風に耐えられるよう頑丈に作られています。

織物と染 県内の農村では、蚕を飼い絹をとってはたおりのする手仕事が多くみられました。現在では、西置賜郡の長井・白鷹あたりで見られる紬織りが残っており、国の伝統工芸に指定されています。機織りの音は農村の各家から聞え、母が娘のために織りものを織る自給自足のくらしでありました。特に、米沢藩では、新潟県の小干谷から職人を招き、絹織・紬織の手工業化をはかり、この伝統が米織を発展させました。絹織物は、その他新庄の亀綾織・鶴岡の縹子・羽二重など県の特産物として好評を得ました。

絹織物は上品なもので、庶民の普段着として木綿が用いられました。江戸時代～明治中頃までは県内でも綿が栽培され、利用されてきました。綿の他に青芋は西村山郡大江町の七軒地区が特産地で、山辺の蚊張の材料に利用されました。青芋で作業着を作り、アイで染めると虫除けになると信じられたりしました。庄内地方では、布をアイで染め、塩分のある強風の中でも長く愛用できるように「サンコ」をするようになりました。庄内サンコは、紺地に白糸で刺し、美しい文様をつくっています。紺地に紺の糸で刺

すのを「かくれ刺し」といいます。

木綿は糸染・板染などをして縞木綿は戦前の山形モンペに利用されました。糸を絞り染して織られたのは白鷹かすりとして愛用されました。

歴史的に由緒のある大きな屋敷に行くと、夜は夜着を着せられて就寝しました。アイ染めに白く筒書された宝模様、布団皮に大胆なデザインで表現されている東ね肘斗模様などの祝模様は、その家の風格を感じさせます。

山村では青芋の他に楡の皮から糸をつくり縞織をつくります。西田川郡温海町の関川では、長い伝統を今でも守っています。楡皮や青芋で織った着物は、ほめた人に着せて柔らかくなった頃に返して貰うというエピソードもあります。

草 工 品 草工品のなかで最も多く利用されているものはわら細工です。米の収穫が終ると農家の冬仕事として作られました。わら仕事は次の年の農作業に必要なものを多く作ります。また、日常のくらしのなかで利用するものを作ります。わらは柔軟性があり、編む・組む・織るの手技の習得に利用され、美しい生活用具を生み、高い技法をもつ男ほど良い婿さんだと評価されたそうです。

わら細工で最高の技をもって作られるのは「みの」と「バンドリ」です。細縄やおおそ糸・色とりどりの草木染の布切と、わらを組み合わせるにつくられた山形周辺の「荷背負みの」（ニセミノ）・庄内地方のバンドリがあります。男が嫁さんのために、これらのみのを送り、貰った嫁さんは一生愛用することになっていました。

みのは、わらだけに限らず、すげ類（ミヤマカンスゲ・ショウジョウスゲ・ミチノクホンモンジスゲなど）とか、ぶどう皮、オッカワ、ガバなどが利用され美しく編まれています。江戸時代の豪農は、シュロの繊維を仕入れて「ハレみの」を作って着用し威厳を保ちました。

草工品としてつる細工があります。夏の土用になると山へ出かけ、ぶどう、ふじ、あけび、などを採集し、川に浸したり、陰干しなどをして保存し、冬になると作ります。山桑を摘む大きなドウフウから小さな手籠（テング）まで、いろいろな生活用具が生まれました。

日常のくらしの中で使われる手籠（テング・ハケゴ）には、ガバ・マコモなどで作られたものがありますが、雪ぐつなどの材料にも利用され、美しく仕上げられるのが特徴です。手